

令和6年度学校自己評価（最終）

鳥取県立智頭農林高等学校

中長期ビジョン (学校ビジョン)		「地域産業及び社会の発展に貢献できる人材の育成」 ～一人一人の生徒を大切にしたい教育の実践～		本年度 重点目標	1 専門教育の充実 2 学力向上 3 キャリア教育の推進 4 こころの教育の充実 5 地域連携の充実 6 情報発信の充実			(1) 質の高い専門教育の実践 (2) 資格取得の推進 (1) 基礎学力の定着 (2) 授業力の向上 (3) ICT等を活用した教育の実践 (1) 進路指導の充実 (2) 職業観・勤労観の育成 (1) 規範意識の醸成 (2) 自己理解・他者理解に基づいたよりよい人間関係の構築 (3) 自己肯定感の育成 (1) 地域の教育資源の活用 (2) 科の特色を生かした地域連携の推進 (1) 学校ホームページ、体験入学、中学校説明会などにおける本校の魅力の発信 (2) 広報活動の充実						
年度当初									中間評価(10)月			最終評価(3)月		
評価項目	評価の具体項目	現 状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策	経過・達成状況	評価	改善方策				
1 専門教育の充実	(1)質の高い専門教育の実践 (2)資格取得の推進	○「スーパー農林水産業士」認定者数はR3年度2名、R4年度1名、R5年度4名で、「アグリマイスター制度」の認定者数は、R3年度1名、R4年度0名、R5年度1名であった。 ○実習は少人数で丁寧に指導を行っているが、生徒の主体的な活動にまで至っていない。 ○資格取得に対して、意欲的な生徒と無関心な生徒の二極化が見られる。	○地域産業との連携を有効活用し、「スーパー農林水産業士制度」「アグリマイスター制度」などの高度な知識と技術を必要とする専門性の高い制度を活かした進学・就職ができる。 ○生徒自らが目標を設定し、その目標に向かって主体的に学習に取り組んでいる。 ○卒業までに専門教育の学習を活かした資格を1つ以上取得している。	○毎日の授業の中で、地域産業や教育機関との連携を深めるとともに、社会人講師等を積極的に活用し、高度な技術を習得する。 ○職員で個々の生徒の状況を共有し、連携しながら、生徒が目標をもって学習できるよう働きかける。 ○授業で基礎基本を学習した上で、資格取得に臨む指導を行う。	○地域の産業界との連携をスムーズに行うことができおり、生徒個々の高度な技術の取得につながっている。本年度は「スーパー農林水産業士制度」取得に3名が挑んでいる。 (R4：1名、R5：4名) ○校内での情報共有と連携ができている。 ○資格取得LHRを各科で行い、生徒の積極的な取得を促した。	B	○引き続き地域産業界との連携を進めていく。 ○引き続き校内で連携しながら、生徒の支援や指導を行っている。 ○資格取得に向けて指導を継続する。	○スーパー農林水産業士に認定された生徒3名は制度を活かした進路選択につなげることができた。アグリマイスター認定制度の認定者は無かった。(R5：1名) ○生徒アンケート(12月)の「授業中は先生の話をよく聞き真面目に取り組んでいる」の項目が93.4%であった。 ○3年生については、卒業までに専門教育の学習を生かした資格を1つ以上取得することができた。	B	○アグリマイスター制度の認定者を増やすために、1年次から関係する資格を取得するよう計画的な指導を行う。 ○生徒の状況を確認、情報共有しながら複数で生徒に働きかける。 ○引き続き校内連携を進め資格取得に向けた支援を行う。				
		(1)基礎学力の定着 (2)授業力の向上 (3)ICT等を活用した教育の実践	○各学年・教科でドリル学習や課題テスト等を通年で実施し、基礎学力の向上につなげている。 ○多くの生徒が専門科目の学習に意欲的に取り組んでいる。 ○ICTは授業での活用は進んでいるが、より効果的な活用を研究する必要がある。	○成功体験の積み重ねや学び合いのある授業、ICTを活用した授業、授業のユニバーサルデザイン化などの取組が組織的に行われており、生徒の基礎学力向上につながっている。 ○生徒の授業アンケートの「専門科目の学習に意欲的に取り組んでいる」の項目が90%以上、「授業をとおして基礎学力が身についている」の項目が80%以上になっている。 ○教職員によるタブレット端末の活用環境が整い、ICT機器を活用した教員の活用実践が高まっている。	○各教科の基礎的学力対策を集約して共通理解を図り、授業に生かしていく。 ○質の高い専門教育を実践し、生徒の学習意欲を高める。 ○タブレットを活用した授業研究会や授業実践報告会、各種研修会などへの参加をとおして、実践力の養成を推進する。	○各学年・教科でドリル学習や課題テスト等を実施している。 ○生徒アンケート(7月)の「専門科目の学習に意欲的に取り組んでいる」の項目は95.3%、「授業をとおして基礎学力が身についている」の項目は約81.4%であった。 ○授業研究会を開催して授業力の向上につなげている。また、各教科でGoogleクラスルームの開設やプロジェクターを使用した授業展開によりICTを活用した教育活動に取り組んでいる。	B	○SPI1テスト結果を踏まえ、各教科で基礎的学力の向上の取り組みを進める。 ○専門教科において、外部講師を活用するなど、授業内容の充実を図る。 ○授業者に対してICT機器利用等のアンケートを実施し、積極的な活用につなげる。	○各学年・教科でドリル学習や課題テスト等を通年で実施した。 ○生徒アンケート(12月)の「専門科目の学習に意欲的に取り組んでいる」の項目は97.4%、「授業をとおして基礎学力が身についている」の項目は88.2%で目標を達成した。 一方で、3年時実施のSPI1テスト結果において総合得点率が全国と比較してマイナス11ポイントの低い結果であった。 ○2回の授業研究会を開催して授業力の向上の取り組みを進めた。結果、各教科でGoogleクラスルームの開設やプロジェクターを使用した授業展開など、ICTを活用した実践が広がっている。	B	○SPI1テスト結果を踏まえ、各教科で基礎的学力の向上の取り組みを進める。 ○授業研究会を通じて、ICT活用力と授業デザイン力の高揚を図る。 ○教室のプロジェクターを活用しやすい環境に整える。			
3 キャリア教育の推進	(1)進路指導の充実 (2)職業観・勤労観の育成	○勤労意欲は高いが、継続的な学習に取り組めず、基礎学力の向上が求められる生徒がみられる。 ○本校の教育内容と関連した企業への就職や学校への進学が一定数ある。 ○インターンシップにおいても科の学習内容と関連した企業を選択する生徒が増えてきている。	○専門的な技術を習得して、地域の担い手として地域社会に貢献しようとする意識を持っている。 ○上級学校への進学を目指し、意欲的に専門的な資質・能力を習得し、地域の将来を担う人材を育成する。 ○本校の教育内容と関連した企業等への就職者及び専門性を活かした進学者の割合が40%を超える。	○「ふるさとキャリア教育全体計画」に従い、生徒個々のキャリア発達を促す。 ○インターンシップ、校内企業説明会、上級学校見学会および社会人を活用した事業等をおとして、自己実現について考える。 ○適切な進路情報を発信することで、生徒の意識を高める。	○就職試験等に対応できる基礎学力向上の取組が急務である。 ○校内企業説明会は有意義であったが、1・2年生の参加は少なかった。インターンシップ、上級学校見学会、進路セミナー等は今後開催予定。 ○校外模試や進路テストなどで、進路意識の向上に努めているが、生徒の関心が薄い。	B	○学校全体で基礎学力や一般常識の向上につながる取組を継続する。 ○引き続き予定している計画を実施していく。 ○進路面談等をおとして、生徒個々に応じた進路意識の向上を図る。	○進路セミナー、社会人セミナー、キャリア講演会等を通して勤労観や社会性の習得につながった。特に、インターンシップは有効であった。生徒アンケート(12月)の「学校で学んだ知識を活かして将来は地域に貢献したい」の項目は73.7%であった。(R5：84%) ○上級学校への進学者の割合は30.4%であった。(R5：43.3%) ○校内企業説明会への参加者は、延べ89名であった。本校の教育内容と関連した企業等への就職者及び専門性を活かした進学者の割合は52%であった。(R4：56%、R5：50%)	A	○1年時から進路意識を高める取組を探る。(進路面接の実施、基礎学力の向上、家庭学習の推進等)				
		(1)規範意識の醸成 (2)よりよい人間関係の構築 (3)自己肯定感の育成	○生徒は学校の規則に則り学校生活を過ごしている。コミュニケーション能力の不足や他人の気持ちを察することが苦手な生徒間のトラブルはある。 ○人間関係の構築に困難な生徒が在籍しており、生徒への支援や指導、教育相談部との面談を実施している。 ○学校生活全体で人権教育に取り組んでいるが、相手に対する思いやりに欠ける言動がみられることがある。 ○週1回の執行部連絡会の定例化により行事の目標の明確化や役割分担がわかりやすくなり主体的に活動できた。これを継続していきたい。	○生徒が安心・安全に学校生活を過ごすことができる体制を構築する。 ○生徒一人ひとりが居心地のよいクラスの中で落ち着いて学習に取り組んでいる。 ○生徒一人一人の人権意識が向上し、現在よりも相手に思いやりをもった言動ができるようになる。 ○学校行事・生徒会活動・農業クラブ活動・家庭クラブ活動・クラス役員活動の経験を通して自主性・積極性・協調性を身につけ、自己肯定感へつなげる。	○問題行動への対応のみならず、授業規律の徹底や学校行事などをおして自己肯定感や自己有用感を育成し、問題行動の予防に努める。 ○担任・関係職員と保護者、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、外部機関と連携を密にして、生徒の支援にあたる。 ○昨年度と同様、日常生活や人権LHRでの積極的な取組が必要である。 ○学校行事・生徒会活動・農業クラブ活動・家庭クラブ活動・クラス役員活動を主体的に企画・運営し、そこに参加することで多くの生徒が経験値を上げ、リーダーシップを養い学校を活性化させる。	○昨年度より指導件数は増加しているが、早期発見と早期対応に努め、各学年や各分掌と連携して取り組むことで重大事となることを防止している。 ○連携を密に計画しながら支援にあたる。各計画作成における校内体制を整備し、生徒支援に活用している。 ○密になる生徒について引き続き面談等を行う。内容によってはSC・SSWにつなぐことも行っていく。 ○今後も行事や研修などを計画的に行い、人権意識の向上に取り組む。 ○農林祭(11月)に向けて生徒たちが自分の役割を果たし、準備・運営等を行うことで学校を活性化させる。	B	○生徒の多様化が進み、様々な困難や課題を抱える生徒が増えているが、学年と分掌で連携して細やかな指導を行うことにより問題行動の未然防止に努める。 ○密になる生徒について引き続き面談等を行う。内容によってはSC・SSWにつなぐことを行っていく。 ○今後も行事や研修などを計画的に行い、人権意識の向上に取り組む。 ○農林祭(11月)に向けて生徒たちが自分の役割を果たし、準備・運営等を行うことで学校を活性化させる。	○昨年度より指導件数は増加しているが、同じ生徒が複数回指導を受ける傾向があるためと思われる。日頃から問題行動の早期発見と早期対応に努め、各学年や各分掌と連携して取り組み重大事となることを防止している。 ○学校生活等に関する悩みや不安な生徒に対して面談を実施し、スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーにつなぐ対応も行った。 ○人権LHRおよび事前事後学習会、人権委員会を計画通り行い、人権意識の向上に取り組んだ。また、状況に応じて生徒の個別指導を行った。 ○毎週生徒会執行部会を開催し、生徒が主体的に学校行事等の企画・運営を行えるよう努めた。執行部のみならずクラス役員の活動の場も増え、学校を活性化させるとともに活躍することで自己肯定感の向上につながった。	B	○問題行動の予防には、日頃から職員間で生徒の情報を共有し対応していくことが必要である。また、保護者や外部機関との連携も重要である。 ○関係者と情報共有を密におこない、居心地の良い学校生活が過ごせるよう生徒の支援・対応に努める。 ○身近で起こる言動やSNSに関わるトラブルが起きる危険性(教員が知らない場面も含めて)が高くなっているため、LHRなどで未然防止のための取組を現在より計画的に行う。 ○引き続きクラス役員活動を活性化させるとともに定例的な活動を増やしていく。			
4 こころの教育の充実	(1)規範意識の醸成 (2)よりよい人間関係の構築 (3)自己肯定感の育成	○生徒は学校の規則に則り学校生活を過ごしている。コミュニケーション能力の不足や他人の気持ちを察することが苦手な生徒間のトラブルはある。 ○人間関係の構築に困難な生徒が在籍しており、生徒への支援や指導、教育相談部との面談を実施している。 ○学校生活全体で人権教育に取り組んでいるが、相手に対する思いやりに欠ける言動がみられることがある。 ○週1回の執行部連絡会の定例化により行事の目標の明確化や役割分担がわかりやすくなり主体的に活動できた。これを継続していきたい。	○生徒が安心・安全に学校生活を過ごすことができる体制を構築する。 ○生徒一人ひとりが居心地のよいクラスの中で落ち着いて学習に取り組んでいる。 ○生徒一人一人の人権意識が向上し、現在よりも相手に思いやりをもった言動ができるようになる。 ○学校行事・生徒会活動・農業クラブ活動・家庭クラブ活動・クラス役員活動の経験を通して自主性・積極性・協調性を身につけ、自己肯定感へつなげる。	○問題行動への対応のみならず、授業規律の徹底や学校行事などをおして自己肯定感や自己有用感を育成し、問題行動の予防に努める。 ○担任・関係職員と保護者、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、外部機関と連携を密にして、生徒の支援にあたる。 ○昨年度と同様、日常生活や人権LHRでの積極的な取組が必要である。 ○学校行事・生徒会活動・農業クラブ活動・家庭クラブ活動・クラス役員活動を主体的に企画・運営し、そこに参加することで多くの生徒が経験値を上げ、リーダーシップを養い学校を活性化させる。	○昨年度より指導件数は増加しているが、早期発見と早期対応に努め、各学年や各分掌と連携して取り組むことで重大事となることを防止している。 ○連携を密に計画しながら支援にあたる。各計画作成における校内体制を整備し、生徒支援に活用している。 ○密になる生徒について引き続き面談等を行う。内容によってはSC・SSWにつなぐことも行っていく。 ○今後も行事や研修などを計画的に行い、人権意識の向上に取り組む。 ○農林祭(11月)に向けて生徒たちが自分の役割を果たし、準備・運営等を行うことで学校を活性化させる。	B	○生徒の多様化が進み、様々な困難や課題を抱える生徒が増えているが、学年と分掌で連携して細やかな指導を行うことにより問題行動の未然防止に努める。 ○密になる生徒について引き続き面談等を行う。内容によってはSC・SSWにつなぐことを行っていく。 ○今後も行事や研修などを計画的に行い、人権意識の向上に取り組む。 ○農林祭(11月)に向けて生徒たちが自分の役割を果たし、準備・運営等を行うことで学校を活性化させる。	○昨年度より指導件数は増加しているが、同じ生徒が複数回指導を受ける傾向があるためと思われる。日頃から問題行動の早期発見と早期対応に努め、各学年や各分掌と連携して取り組み重大事となることを防止している。 ○学校生活等に関する悩みや不安な生徒に対して面談を実施し、スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーにつなぐ対応も行った。 ○人権LHRおよび事前事後学習会、人権委員会を計画通り行い、人権意識の向上に取り組んだ。また、状況に応じて生徒の個別指導を行った。 ○毎週生徒会執行部会を開催し、生徒が主体的に学校行事等の企画・運営を行えるよう努めた。執行部のみならずクラス役員の活動の場も増え、学校を活性化させるとともに活躍することで自己肯定感の向上につながった。	B	○問題行動の予防には、日頃から職員間で生徒の情報を共有し対応していくことが必要である。また、保護者や外部機関との連携も重要である。 ○関係者と情報共有を密におこない、居心地の良い学校生活が過ごせるよう生徒の支援・対応に努める。 ○身近で起こる言動やSNSに関わるトラブルが起きる危険性(教員が知らない場面も含めて)が高くなっているため、LHRなどで未然防止のための取組を現在より計画的に行う。 ○引き続きクラス役員活動を活性化させるとともに定例的な活動を増やしていく。				
		(1)地域の教育資源の活用 (2)地域連携の推進	○ちのりんショップ、地元の保育所との菜園活動や藍染め交流、福祉施設での実習など、地域交流の場ができており、様々な人との関わりを体験することができている。 ○地域連携活動を発信して本校の特色や魅力をPRしている。 ○地域産業の「藍染」「格子戸」「造園」等、地元職人と連携した活動を行っている。	○地域連携事業の活用により、地域の方との交流をおとしてコミュニケーション力や表現力が向上している。 ○生徒や教職員の専門的知識や技術力を地域に発信している。 ○地域連携の取組が浸透し評価され、地域アンケートの各取組について「良い活動」と「まあまあ良い活動」と回答している割合と「地域の活性化に役立っていると思いますか」の項目が90%以上になっている。	○地域の保育園・高齢者福祉施設との園芸交流、藍染め交流、智頭宿魅力アッププロジェクトの格子戸作成、ちのりんショップの取組をさらに推進する。 ○地域住民と関わる機会を増やし、主体的な活動の場を設ける。 ○地域産業との連携や「地域基礎」の一層の充実を図る。	○各科の地域連携を通じて生徒が様々な体験をしており、充実した連携となっている。 ○地域連携の活用により地域住民・産業従事者と係わる機会が増える。 ○「地域基礎」の授業の一環で取り組んでいるフィールドワークを通じて、地域の方と触れ合う機会が増えている。	B	○引き続き地域との連携を深めていく。 ○地域連携が生徒の主体的な活動につながるよう働きかける。 ○地域連携活動がさらに充実するよう、創造と工夫を凝らしていく。	○「藍染め交流」、「ちのりんショップ」などの取組をおとしてコミュニケーション力や表現力が向上している。 ○地域連携を専門科目に関連づけている科目数はのべ26科目あり、教育内容として定着している。藍染のれんや格子戸製作などの地域連携をおとして地域の方とふれあう機会が増え、本校教員の専門知識や技術力を地域に発信することができている。 ○地域アンケート(12月)では、各取組について「良い活動」と「まあまあ良い活動」と回答している割合は100%、「地域の活性化に役立っていると思いますか」の項目が98.4%であった。	A	○学習内容について考え理解させる時間を確保しつつ、ねらいに沿った学習の充実を図る。 ○担当者、管理職を交えた関係者間の連携や、事業の実施目的などの再確認・情報共有の場を設定する。 ○さらに地域連携活動を推進するよう関係機関等と相談しながら創意工夫をこらしていく。			
6 情報発信の充実	(1)本校の魅力発信 (2)広報活動の充実	○学校HPの更新は定着していて、絶えず行うことができていく。 ○昨年よりYouTube動画の配信やInstagramでの投稿を開始。学校HPの閲覧数は一定数あるものの増加傾向に至っていない。 ○生徒会行事の情報発信や智頭町への情報発信については十分にに取り組むことができなかった。 ○県外生徒については、地域みらい留学のイベント(対面・オンライン)に参加し本校の魅力を発信している。	○学校HPの更新を随時に行い、閲覧数が前年度より増加している。 ○生徒や教職員の専門的知識や技術力を地域に発信している。 ○生徒会行事や部活動についての情報発信を継続的に行うとともに、生徒会執行部による智頭町のHPへの情報発信を行う。 ○体験入学や学校説明会に参加し、本校を志望する県外の中学生が数名いる。	○学校HPの更新手順を教職員に周知し、授業や部活動などの記事の情報提供を迅速に行う。 ○生徒、職員へアンケートを実施しHPの改善を図る。 ○部・同好会顧問に対する働きかけに努めるとともに、智頭町の「高校生ライター」の研修を早い時期に受け智頭町への情報提供を継続的に行う。 ○地域みらい留学のイベントに引き続き参加するとともに、学校独自の学校説明会等を開催する。	○学校HPの更新を頻繁に行っている(閲覧数 R5：約2300/月、R6：約4200/月) ○生徒作品展を実施した(8月：イオンモール鳥取北、9月：石谷家住宅)。また、Instagramを開設し1年経過。10月現在のフォロワー数は204。 ○5月に高校生ライター研修会を生徒会執行部が受け、智頭町のHPに記事を投稿している。 ○地域みらい留学合同説明会(東京6月、大阪7月)に参加した。夏季休業中に東京から2名の学校見学があった。	B	○HPの閲覧数の増加に向けての方策を検討するために、生徒や職員へのアンケートを実施する。 ○引き続き情報発信を積極的に行う。 ○農林祭(11月)や、ちのりんショップ等のイベントや農場の様子等を記事にして、智頭町への情報提供を継続的に行う。 ○SNSや外部機関と連携したオンラインを活用して、県外中学生に向けた情報発信に努める。	○学校HPの更新は定着していて、絶えず行うことができていく(閲覧数 R5：約2300/月、R6：約3500/月) ○生徒作品展(鳥取市内、智頭町内)を実施するなど、積極的に情報発信をすることができた。また、学校だより、学校紹介動画、学校案内パンフレット、ポスターの製作をおとして本校の魅力を多チャネルで発信することができている。 ○生徒会執行部が「高校生ライター」として農林祭や伐木競技交流会についての記事を智頭町のホームページに掲載された。 ○年間をおとして、地域みらい留学のプログラムに参加した。県外からの学校訪問は3名あり、その中で本校を志望する生徒があった。	B	○広報活動のアンケートを通じて、各種媒体の内容改善に努める。 ○来年度も引き続き本校の特長や魅力発信を行う。 ○智頭町の「高校生ライター」の取り組みを継続していく。				
		(1)長時間勤務者の解消 (2)業務の効率化	○時間外業務が月45時間、年360時間を超える教職員がいなかった。 ○分掌部長等と分掌の成果と課題についての情報共有に努めた。	○時間外業務が、月45時間、年360時間を超える教職員がいなかった。 ○分掌業務を点検・検証しながら改善を図り、業務の継続性と効率化を進める。	○時間外業務が多い職員へ、個別に縮減を呼びかける。 ○各分掌部長と定期的に情報交換を行い、分掌業務の改善に繋げていく。	○時間外業務が多い教職員に対して声かけを行うことで時間外が増えないように努めている。 ○分掌部長と日々の業務の成果と課題について情報共有に努めている。	B	○時間外勤務時間の多い職員への縮減呼びかけと、職員間の綿密な情報共有を継続する。 ○こまめに分掌部長との情報交換を行い、課題の改善に引き続き取り組む。	○時間外勤務が月45時間、年360時間を超える教職員はいなかった。 ○分掌部長等と分掌の成果と課題についての情報共有に努め、業務の改善に繋げた。 ○引き続き分掌部長との情報共有を行い、課題の改善に努める。	B	○時間外勤務時間の多い職員への縮減呼びかけと、職員間の綿密な情報共有を継続する。 ○引き続き分掌部長との情報共有を行い、課題の改善に努める。			

評価基準 A：十分達成[100%] B：概ね達成[80%程度] C：変化の兆し[60%程度] D：まだ不十分[40%程度] E：目標・方策の見直し[30%以下]

令和3年度学校自己評価(案)

鳥取県立智頭農林高等学校

中長期ビジョン (学校ビジョン)	「一人ひとりの生徒を大切に」を教育の根幹におき、勤労と責任を重んじ、心身ともに健康で地域産業及び社会の発展に貢献できる人材を育てる。	本年度 重点目標	(1) 専門教育の充実 ～各科の授業実践及び資格取得の取り組みをとおして、学びの質の向上を図る～ (2) 学力向上 ～基礎学力の定着と授業力の向上～ (3) キャリア教育 ～進路指導の充実と職業観・勤労観の育成～ (4) こころの教育 ～規範意識の醸成、基本的生活習慣の確立、家庭との連携～ ～自己理解・他者理解に基づいた人間関係づくり、自己肯定感の育成、健やかな体づくり～ ～教育相談、特別支援教育及び人権教育のより一層の充実～ ～地域の教育資源を活かし、本校の教育資源を地域に活かす、顔の見える地域連携、先輩から後輩へ、広報の拡大と充実～ (5) 地域連携の充実 ～地域の教育資源を活かし、本校の教育資源を地域に活かす、顔の見える地域連携、先輩から後輩へ、広報の拡大と充実～ (6) 学校業務の改善 ～学校業務改善の取り組みを進め、一人一人を大切にした教育の充実を図る～
---------------------	--	-------------	---

令和3年度当初					中間評価（10）月		最終評価（1）月				
評価項目	評価の具体項目	現 状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策	経過・達成状況	評価	改善方策	
1 専門教育の充実	授業実践と資格取得の取り組みをとおして、学びの質の向上を図る	○スーパー農林水産業主士の認定者数は、R1年度は0名であったが、R2年度1名となった。 ○資格取得の受験率・合格率をあげるために、日々の学習習慣を定着させたり、受験案内や意欲の喚起を行った。生徒数が少ない状況では、率を意図することよりも、今後はより高度な資格に挑戦する生徒を増やす指導をしていきたい。 ○地域の産業界や教育機関と多くの連携事業をしているが、基本技術の習得がおろそかになっていると指摘がある。	○「スーパー農林水産業主士制度」「アグリマイスター制度」や地域産業との連携を有効活用し、高度な知識と技術を身に付け専門性を生かした進学・就職ができる。 ○学習規律のある授業態度を育成した上で、各科の専門性を深め、専門的な知識・技能を身に付けさせる。そして、地域の産業界や教育機関等との連携では、校内では習得できない知識技術を身に付ける。 ○生徒自らが将来の目標を定め、より意欲的に学習に取り組み、専門性を活かした資格取得に動んでいる。各科の重点資格の取得合格率もしくは受験率が前年度比10%以上向上している。ただし、数値目標を単純に追うだけでなく受験に際して、教職員の丁寧な指導や生徒の主体的に取り組む姿勢が見られることが前提である。	○日々の授業実践を大切にたした上で、地域の産業界や教育機関との連携を深め、社会人講師等を積極的に活用し、地域の専門家から教わることで高度な技術を習得する。 ○実践的な学習等を通して、知識や技術が習得できる授業を行う。また、他教科や地域産業等と連携し、より効果的に授業をすすめる。 ○授業や「資格取得LHR」を通して、3年間を見据えた資格取得に向け、個別に目標を設定させながら、専門教科の学習の深まりにつなげていく。	○アグリマイスターやスーパー農林水産業主士制度の取得希望の生徒が増加している。また、地域の産業界や教育機関との連携により高度な技術を習得できている。 ○地域産業との連携は十分である。 ○資格取得LHRを行った。また、教員が資格取得を勧めることで生徒の取得者が増加する傾向にある。	B	○専門教育に関する人員の確保。 ○校内連携をさらに進める。 ○資格取得に向けた補習等ができる体制づくりを行う。	○アグリマイスターR2 F1名 → R3 C1名 スーパー農林水産業主R2 H1名 → R3 F2名 取得希望の生徒は増加傾向。継続的に地域の産業界や教育機関との連携により高度な技術を習得できている。 ○地域産業との連携は、例年通り行われているが、学習規律等の指導が必要である。 ○資格取得に関する合格率(1月 合格判定分のみ) R2 57/98名 58% → R3 72/183 56% 77%→66%→58%→56%(年度別割合)	B	○専門教育に関する人員の確保。 ○校内連携をさらに進める。 ○目標の設定変更(各科ごとに重点資格を設定し受験率や合格率を設定する)	
	学力向上	基礎学力の定着と授業力の向上	○授業や教室環境のユニバーサルデザイン化が進められつつある。 ○ICTタブレットの更新、活用環境の改善を行ったことで活用頻度が増加している。 ○本校生徒の基礎学力向上につながる手立てを検討し、実践に向けて取り組もうとしている。 ○「学びあひ」を取り入れた授業の実現に向け、教材の可視化、実物提示、観察実験を取り入れる工夫がされている。	○成功体験の積み重ねや学びあひのある授業、ICTを活用した授業、授業のユニバーサルデザイン化などの取り組みが組織的に行われており、生徒の基礎学力向上につながっている。 ○生徒の授業アンケートの結果、授業の理解度、分かりやすさや興味等が80%以上になっている。 ○「学びあひ」を取り入れた授業の実施頻度が、各教員年間5回以上になっている。 ○GIGAスクールの本格的な導入に向けて、教職員によるタブレット端末の活用環境が整い、授業実践の研鑽が行われる。	○授業のユニバーサル化について、教職員の共通理解を図る。 ○授業タブレットを活用した授業研究会、授業実践報告会や各種研修会への参加をとおして、教員相互の授業力向上を図る。 ○生徒各自の特性や対人関係に配慮した「学びあひ」をとおして、生徒の実状に即した学習方法を模索し授業の改革を進める。 ○学習意欲を高め、「学びあひ」の活動を促すためのICT機器の活用方法を検討する。また、学習指導委員会を中心として、校外研修会の内容を全職員に還元する。	○計画に沿った、教員相互の授業力向上を目的とした研修の実施がまだ、できていない。 ○学校評価生徒アンケート結果から、学習に対し意欲的かつ真面目に取り組んでいる生徒の割合が93%、高校の振り返り学習(中学時の学習の復習)をとおして基礎学力が身に付いたと感じている生徒の割合が75%であった。 ○昨年度から引き続き、本校が目標とする学力を身に付けさせるための「授業での具体的取組」を、全職員で取り組んでいる。	C	○ICTの活用を含めた、授業力の向上を目的とした職員研修を実施する。 ○研究授業を実施して生徒の実状に即した学習方法を模索する。 ○GIGAスクールに向けた研修を継続的に行っていく。	○授業評価アンケートで「授業はわかりやすい」の問いに93%の生徒が肯定的な回答をしている。 ○学校評価生徒アンケートにおいても「専門科目の学習に意欲的に取り組んでいる。」97% 「先生の話をよく聞き、まじめな態度で取り組んでいる。」88% 「振り返り学習をとおして、基礎学力が身に付いている」84%が 良好な回答をしており意欲的に学習に取り組んでいると思われる。 ○「学びあひ」のある授業回数は累計していないので不明。 ○GIGAスクールに向けた職員研修を10月5日、2月24日(予定)に実施。 ○ICTを活用した公開研究授業を11月9日に実施。	B	○ICTの活用に向けた継続的な職員研修を実施する。 ○「学びあひ」のある授業についてはしばらく実践を控えるようにとの指示があり、現状を掌握しづらいが 職員各自がICTを活用した指導案を検討するなどの 研鑽が求められる。
3	キャリア教育	進路指導の充実と職業観・勤労観の育成	○本校の各学科の教育内容と関連した企業等への就職者が、H30年度は34%、R1年度は26%、R2年度は41%であった。 ○インターンシップにおいても科の学習内容と関連した企業を選択する生徒が増えている。 ○「学びあひ」を取り入れた授業の実現に向け、教材の可視化、実物提示、観察実験を取り入れる工夫がされている。	○専門的な技術を習得して、地域の担い手として地域社会に貢献しようとする意識を持っている。 ○本校生徒の基礎学力向上につながる手立てを検討し、実践に向けて取り組もうとしている。 ○「学びあひ」を取り入れた授業の実現に向け、教材の可視化、実物提示、観察実験を取り入れる工夫がされている。	○キャリア教育の年間計画に従い、キャリアパスポートを有効に活用しながら3年間で体系化したプログラムを実施する。 ○先進校視察、上級学校への見学研修および高大連携事業を活用し意欲を持たせ、進学への意欲付けを行う。 ○生徒のコミュニケーション能力を高め、社会情勢を意識させる取り組みを進める。 ○部活動や農く・家く活動、委員会活動等を通して、自主性や積極性・協調性などを身に付け、自己肯定感へつなげる。	○昨年よりキャリアパスポートの活用がみられる。 ○3年生の就職希望者全員が県内企業への就職を希望しており、地域社会に貢献しようとする生徒が多い。校内企業説明会は、生徒にとつて、有意義であった。 ○コロナウイルス感染症の影響で、見学や研修が中止や延期となった事業があり、今後実施に向けて取り組みたい。 ○体育祭が中止になったことは残念であるが、農林祭に向けて生徒会執行部は意欲的に活動している。総体や農く県大会・中国大会に出場し、優秀な成績を収めた。	B	○上級学校見学会(1年)や就職セミナー(2年)の開催に取り組む。 ○2年生の進路意識と基礎学力の向上のための取り組みを検討したい。 ○キャリアパスポートのさらなる活用を進めたい。	○校内企業説明会、新規学卒企業説明会、就職セミナーなどを開催した。2年生のインターンシップや1年生の上級学校見学、各種講演会も開催した。高大連携もできることには取り組んだ。 ○就職・進学の日数がほぼ立っており(1月19日現在)、おおむね生徒は 自分の希望した進路先へ進むことが出来た。 ○キャリアパスポートの活用は見られた。 ○鳥取大学農学部や県職員(土木職)をはじめ、本校の教育内容と関連した企業等への就職者及び専門性を活かした進学者が46%になった。 ○農林祭やスポーツ大会などしっかりと運営できた。生徒会執行部は積極的に活動できた。	B	○早期からの個別指導の徹底を図る。 ○体育会系部活動の活性化を図る。
4 こころの教育	規範意識の醸成	○指導対象の生徒数は減少しているが、指導内容は多様化しており、家庭や地域、外部機関と連携した指導体制を継続して行っている。 ○生徒一人ひとりを大切にした指導を心がけることで生徒理解を深め、いじめや問題行動等の未然防止に努めている。	○基本的な生活習慣が身に付き、落ち着いた学校生活を送るとともに授業規律が確立されている。 ○校則を遵守するとともに、端正な服装・頭髪、日頃のあいさつなど自ら心がけ行動できる。 ○社会規範や一般常識を理解し、道徳心を持って行動することができる。 ○特別指導を受けていない生徒の割合が90%以上、また、携帯マナー、交通安全に関してルールを遵守している生徒の割合は90%以上となっている。	○毎朝登校時の立ち番で服装・あいさつ指導を行う。また、PTAによるマナーアップの取り組みやあいさつ運動も実施する。 ○授業や集会での授業規律・集団規律を徹底する。 ○いじめアンケートやhyper-QUを計画的に実施し、生徒が抱えている問題の早期発見に努め、生徒理解を深めながら指導する。 ○各研修会を実施する。	○カード指導等を活用し、基本的な生活習慣や授業規律の確立に努めるとともに、各グループや職員間で連携を図り生徒理解に基づいた指導に努めている。 ○特別指導を受けていない生徒の割合は90%以上、携帯マナー・交通安全に関しては意欲的に活動している。総体や農く県大会・中国大会に出場し、優秀な成績を収めた。	B	○生徒理解を深めながら、各グループ及び職員間で連携を密にするとともに、保護者や地域と協力して指導を継続する。	○生徒の情報を各グループ及び職員間で共有し、生徒理解を深めながらの指導に努める。 ○特別指導を受けていない生徒の割合は90%以上である。生徒アンケート集計による携帯マナー・交通安全に関してルールを遵守している生徒の割合は90%以上である。 ○いじめの認知件数は1件である。いじめの発見後は校内いじめ対策委員会を中心に組織的な対応を行った。	B	○生徒の情報を職員間及び保護者と共有して問題となる行動の早期予防・早期発見に努めるとともに、日々の学校生活の指導をとおして生徒の規範意識を醸成していくよう努める。 ○いじめを発見するために生徒の些細な変化を見逃すことなく、本校の「いじめ防止基本方針」に基づいて早期予防・早期発見及び組織的な対応に努めていく。	
	生徒支援の充実	○毎日の授業に規則正しく出席することができず、欠席・遅刻・早退を重ねてしまう生徒が少なからず存在する。 ○特別支援教育への理解は向上しているが、支援のためのスキル不足による困り感がある。 ○通級指導教室が関係職員と連携を取りながら円滑に実施されている。	○生徒一人ひとりが居心地のよいクラスの中で落ち着いた学習に取り組んでいる。 ○hyper-QU結果の「学級満足群」に入る生徒の割合が40%以上を維持する。 ○通級指導教室の運営がスムーズに進行し、支援の必要な生徒一人ひとりに継続した支援が行われている。	○担任・関係職員と保護者、SG・SSW、外部機関と連携を密にして、生徒の支援にあたる。 ○1回目のhyper-QU結果の「学級満足群」に入る生徒の割合は51%であり、昨年の同時期(53%)と同じ傾向である。 ○通級指導教室を予定通り実施し、関係教員と連携をとりながら実施している。 ○SSWの松田先生をお招きし、特別支援教育職員研修会を実施し、教員の指導力向上に努めた。	○担任・関係職員と保護者、SG・SSW、外部機関と連携を密にして、生徒の支援にあたっている。 ○1回目のhyper-QU結果の「学級満足群」に入る生徒の割合は51%であり、昨年の同時期(53%)と同じ傾向である。 ○通級指導教室を予定通り実施し、関係教員と連携をとりながら実施している。 ○SSWの松田先生をお招きし、特別支援教育職員研修会を実施し、教員の指導力向上に努めた。	B	○SC、SSWとの連携をより密にして生徒支援にあたる。 ○特別支援教育研修会で学んだことを生徒支援のためのスキル向上に生かす。	○SC、SSWとの連携をより密にして生徒支援にあたる。 ○特別支援教育研修会で学んだことを生徒支援のためのスキル向上に生かす。	B	○SC、SSWとの連携をより密にして生徒支援にあたる。 ○特別支援教育研修会で学んだことを生徒支援のためのスキル向上に生かす。	
5 地域連携の充実	地域連携を通した全人的発達促進	○ちのりんショップは地域に定着しつつあり、地域の方からの応援を感じられる場となっている。 ○地元の保育所との園園活動や、福祉施設での実習など新たな分野での地域交流の場ができおり、様々な人との関わりを学ぶことができている。 ○本校の教育資源と地域の資源を活用することめざし、地域連携事業を14実施している。	○地域連携事業の活用により、生徒に自己有用感、達成感が生まれ、積極的に学校生活を送っている。 ○地域の方との交流をとおしてコミュニケーション能力や表現力が高まっている。 ○地域連携を教育内容に取り入れる専門科目が、各科で10科目(のべ30科目)以上になっている。 ○結果として、地域と学校がともに元気になり、教員の学習指導や取り組み姿勢が前年度よりも向上している。	○定着しつつあるちのりんショップをさらに改善し、生徒のコミュニケーション能力や経営感覚を育める。 ○「地域基礎」の一層の充実を図ることで、地域の現状や文化を理解し、将来地域を担う人材を育成する。 ○地域の保育園・高齢者福祉施設との園芸交流、藍染交流を行い、相手を思いやる心やコミュニケーション能力を育てる。	○「ちのりんショップ」はふるさと創造科の学習の柱となり安定し充実した運営ができているが、町への依存度や評価の方法など新たな課題が出てきている。 ○「地域基礎」の学習の目的を理解し、フィールドワークやスライド作成に意欲的に取り組めた。また、地域に出かけ地域の方々とふれあうことができた。 ○園児との藍染交流を継続することができた。準備から当日まで一連の作業を通して相手への思いやりを持って行うことができた。	B	○地域連携と通常授業のバランスを再考していく。 ○地域の課題を発見しようとする視点を持たせる。 ○学習のねらいについて考え理解させる時間を確保しつつ、ねらいに沿った学習の充実を図る。 ○異年齢者との交流を継続していく。	○「ちのりんショップ」はふるさと創造科の学習の柱となり安定し充実した運営ができている。継続して更に充実させていきたい。 ○コロナ禍で交流は制限されている中で、地元保育園や高齢者施設との交流は軌道に乗っているが、連携先との日程や内容のミスマッチも表面化してきている。 ○地域の活性化にも役立っている科目数はのべ26科目あり、教育内容として定着している。 ○異年齢者との交流を継続していく。	B	○新たな課題として、町への依存度と「土曜授業等活用事業」の廃止により来年度の運営方法と評価の方法を再考しなければならない。 ○担当者、管理職を交えた関係者間の連携や、事業の実施目的などの再確認・情報共有の場を設定することが必要。	
	地域連携を通した学校と地域の活性化	○生徒数が少ない中、棚田の補修、格子の製作、藍染のれんの制作などの専門性の高い取り組みを継続して実施できている。 ○地域連携活動の評価アンケートは約9割の回答が「よい活動である」との回答で満足度が高かった。 ○地域連携活動を発信して本校の特色や魅力をPRしている。 ○中学生の体験入学の参加者が前年に比べ2割減少したが、入学生は若干増加した。	○農業高校ならではの「ものづくり」体験や「地域交流」体験によって、個々の教員の持つ専門技術や学校の教育力が地域の活性化に役立っている。 ○生徒や教職員の専門的知識や技術力を地域に発信している。 ○地元地域へ本校の取り組みが浸透し評価され、地域からの評価アンケートの満足度が80%以上になっている。	○本校の持っている技術力を活用し、伝統的な文化や技術を継承し発展させる。 ○技能フェア、地域のイベント、学校祭を通して体験教室や展示即売を行い学校の専門的知識や技術を地域へ発信する。 ○各種事業で、地域の専門家を外聘講師として招聘し、その技術力を本校教育へ活用するとともに、本校の教育内容の理解を促す。 ○智頭町百人委員会に提案し、町内で生徒が活動実践を行う。 ○学校紹介動画を作成し、本校の魅力をさらに発信し生徒募集に繋げる。	○地域(石谷家住宅)や創立80周年記念事業で各科作品やフォトギャラリーの展示を行うことができた。 ○関係者(鳥取県、智頭町、学校)による魅力力推進会議や県内5校によるコンソーシアムが立ち上がり、今後の将来像を描きながら具体的な方策についての検討を始めた。 ○学校紹介DVDを作成し、中学校での高校説明会に有効に活用できている。	B	○生徒の活動の成果が提示できる場面を増やす。 ○智頭農林高校魅力力推進会議の意見を伝えながら、校内でも学校の在り方について検討を深める。	○体験入学R2 38名 → R3 43名 に増加した。 ○コロナ対策を徹底しながら地域連携事業を実施し、地域からの理解も得ることができた。(アンケート結果) 地域の活性化にも役立っているに対して肯定する意見が91%。 (地域アンケートより) ○学校紹介動画をSNSで発信する準備を継続している。 ○学校紹介ポスターを新たに作成し、関係各所へ配り掲示をしてもらっている。	B	○本校に関する情報を随時発信するシステムを検討し、実践したい。 ○今まで以上に、地域に関わる仕組みを模索し、実践したい。	
6 学校業務の改善	校務分掌(グループ)業務の見直し	○各グループ内業務の見直しを行う中で、業務の継続性と専門性を踏まえ、グループ業務の割り振りの変更を行った。 ○グループ制の課題が明確になる中、抜本的な見直し(グループの再編、新分掌の編成など)を1年間をかけて検討していく。 ○時間外業務が、年間360時間を超える職員はなかった。また、月30時間を超える職員が年後半にはほぼいなくなった。	○グループ内で互いに業務を確認し、分担・協力するというグループ制の良さが生かされるよう工夫を行う。 ○引き続き、時間外業務が、月45時間、年360時間を超える教職員がいない。	○毎月行っているグループ長会議で、情報交換を行い、学校課題の改善に繋げている。 ○校務室等の整理整頓を推進する。 ○時間外業務の時間が多い職員へ、個別に縮減を呼びかける。	○効率よく業務を遂行するため、グループ制の課題を整理し検討を始めている。 ○時間外勤務が多い教職員に対して面談を行うことで改善が見られている。 ○校務室等の整理整頓を推進する。 ○校務室内の飛沫防止パーテーションを更新したり設置休養室の清掃を行ったりすることで、整理整頓が進んだ。	B	○グループ制の課題について整理し、来年度に向けた学校の分掌体制(グループ制を含む)を整える。	○時間外の縮減については、昨年同様取り組めた。 月あたり時間外業務の平均値が、昨年より減少している月が多い(8/9ヶ月中)。 ○校務分掌の在り方(グループ制)の見直しを行い、令和4年度校務分掌体制の検討を進めた。 ○コロナ感染対策の物品や職場環境の充実(R4農業管理室のエアコン設置)について改善が図れた。	A	○業務の偏りがない校務分掌の人員配置を考へていく。 ○校務分掌の体制を変えることによる効果を見極め、よりよい体制を構築していく。	

評価基準 A:十分達成[100%] B:概ね達成[80%程度] C:変化の兆し[60%程度] D:まだ不十分[40%程度] E:目標・方策の見直し[30%以下]